



朝顔丸の船首像

矢野, 吉治

(Citation)

海事博物館研究年報, 47:33-34

(Issue Date)

2020-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81012189>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012189>



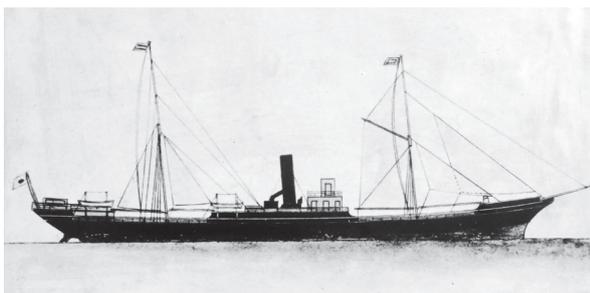
朝顔丸の船首像

海事博物館 館長 矢野 吉 治

令和元（2019）年6月21日、美術家で舞台演出家の「やなぎ みわ」女史により、当館が収蔵する朝顔丸（あさがおまる）船首像〈Figurehead〉の本格的な撮影が行われました。船首像の多くは欧米船の遺物であり、船体から既に取り外された女性型の船首像はアジアでも現存数が少なく、貴重な逸品とのことです。普段は館内の木製中型展示ケース内に納められ、背面以外の三方から実物を子細に見ることができですが、この度、ケースから取り出してその全容を高精細に撮影する場を設けました。そこで、この機会に朝顔丸船首像の由緒を改めて記録に残すことにしました。なお、ここでは神戸商船大学名誉教授で当館顧問の杉浦昭典先生による「朝顔丸船首像と船体装飾の歴史」（海事博物館研究年報第33巻〈2005年3月〉）から一部を引用しています。

朝顔丸

明治22（1889）年1月に当時日本の三菱会社が社船「朝顔」として英国サンダーランドのJames Laing & Sons造船所から購入した総トン数2,461トンの鋼製汽船です。日本の船には船首像を飾る習慣がないことから、英国の造船所に最初から同社の船として発注したのではなく、すでに船首像まで取り付けて竣工間近であった船を何らかの事情で買い取ったのではないかとの推察もあります。なお、汽船「朝顔」は明治26（1893）年6月に日本郵船会社に譲渡され、「朝顔丸」と船名が改められ、東廻り「神戸—小樽」間の沿岸



鋼製汽船 朝顔丸 <2,461G/T>

航路に就航しています。当時の船体は黒塗りで、日露戦争では軍用船として海軍に徴用され、明治37（1904）年5月2日、第3次旅順港閉塞隊に加わって黄金山砲台下に自沈し、水路障害物としてロシア艦船の旅順港への出入りを阻止する役目を担いました。

朝顔丸船首像

右手を胸に当てて心持ち顔を上げ、右上方を仰ぎ見て祈りを捧げる豊満な婦人の木造です。汽船「朝顔（丸）」の船首像として舳先にあったところは、遠くの水平線をきりっと見つめ、その前途をしっかりと見守るという大役を果たしていたことでしょう。1880年代に建造された船の船首像は英国船に限らずヨーロッパでも白色塗装の婦人像が多く、この当時の流行だったようです。既述のように、汽船「朝顔」の船体は黒塗りであったことから、英国より日本へ回航されたときの船首像もまた黒塗りであったと推察されます。旅順港閉塞隊の船は主に広島港から作戦海域に回航されたようですが、おそらくこの時点で取り外されたのでしょう。その後、宮中建安府に保管されていたものが第二次大戦後の昭和23年に当時の運輸省海技専門学院へ移管され、神戸商船大学に引き継がれて今日に至ります。現在、館内に展示されている朝顔丸の船首像は薄緑がかった乳白色に塗りかえられていますが、当館の前身である海事資料館の収蔵品として本格的に整備されるまでは最初の黒塗り塗装のままで、50年近くの長きにわたり放置されていたようです。所々剥離した黒色塗装の下には初期の塗色である白色塗料が散見されたことからこの船首像は純白であったことがうかがえます。

朝顔丸船首像由来

宮中建安府にあったものを終戦後昭和二十三年海技専門学院に譲り受け本學に移管せられたものである。朝顔丸（二、四六一総噸）は一八八九年英國サンダーランドJラング造船所に於て建造

せられた。一八九三年頃岩崎弥太郎氏より日本郵船に譲渡當時より日清戦争徴用期間を除き日露戦役まで東廻り神戸一小樽間沿岸航路、就航、

一九〇四年五月二日第三回旅順閉塞隊参加、黄金山砲台下に爆沈、指揮官向菊太郎海軍少佐以下十七名戦死……廣幡忠隆氏書翰より（原文）



木製展示ケースから取り出し



館内での高精細撮影



朝顔丸船首像 一令和元（2019）年6月21日撮影一